

ては未だ充分に検討されては居なかつた。初學者が地理學の動向を見定めんとする時、自己を繞る現狀と地理學史を繕いて知る過去の間に、明治大正の二代が大きな不連続の間隙をなして積たはつてゐる事を知り困惑するのである。その缺を補ふものとして、此の「日本を中心とせる輓近地理學發達史」の上梓は實に意義深いものと言ふべきである。

著者山口貞雄氏の地理學界に於ける歩みはその自序の中及び奥付中の略歴に明かであるが、それよりも本書を通じて感得せられる著者の誠實そのものの學究態度こそ深く敬意を表し、此の様な仕事に對して誠に適役を得たといふ事を喜ばねばならない。昨年度「地理學」誌上に再度に互つて掲載せられた氏の小論は本書執筆の過程であつたのであらう。

本書は、序説、近世地理學の發達と其の崩壞、現代地理學の建設、結語の四つの章から成つてゐる。序説には日本地理學が國體に基いて「生きもの」の如く生々發展するものであり、しかもそれでゐてそこに一貫せる國土への「親愛感」が流れてゐる事が説かれてゐる。而して支那及び泰西の異質的學統が攝收されても、雖て此の太初以來一貫せる樞軸の下に醇化せられ、各々その所を得しめられて發展して行く所に、日本地理學の傳統が潜んでゐる事も明かにせられてゐる。此の著者の把握は本論の到る所に表れて發達史に一貫性を持たせる役割を果してゐる。本論の内、近世地理學は徳川時代と明治大正時代とに區分せられてゐるが、前者を簡明に、後者を詳細に記述せられたのは本書の性質として當然で

ある。實際に本書の面白さは明治大正時代以後、殊にその末期近代地理學の成熟時代あたり以後にある。そして混迷せる地理學が地誌へ逃避的歸結をなし、その中から現代地理學建設の種音が湧き起つて來る經過は、著者の周到な引例に伴奏されて、本書の極頂をなすものであらう。終結は現代の新日本地理學の行くべき道を力強く説いた結語を以て飾られてゐる。

本書の興味は以上に盡きるものではない。日本地理學の中には支那及び泰西の地理學が醇化されて居る事に従つて、日本地理學の發達史を述べると共に、世界地理學史が同時に織り込まれてゐる事は興味ある試みと言はねばなるまい。

最後に紹介の範圍を越えて批判めいた私言を書く事を許して頂けるなら、著者の解釋の基礎たる觀念に異趣同舟の傾向はないであらうかと言ふこと、日本地理思想の根柢は「親愛感」なる言葉以上につきつめらるべきではないかといふことである。しかし此のやうな事がよし眞實であつても、それは毫も本書の價値を傷つけるものではない。本書は確かに現代地理學建設に對して貢獻するものなる事を信じる。(昭和十八年八月、濟美堂發行・A5版、賣價貳圓八拾七錢) (村上次男)

彙

報

本年度大會は一ヶ月後に學徒出陣をひかえて、緊張した空氣の裡に十月三十、三十一の兩日にわたつて舉行した。

苛烈なる戦局の段階に於て、かくも平和な會合を開き得たことに感謝しなければならぬ。

見學 十月三十日(土) 午前十時より午後三時まで、大徳寺本坊及び高桐院の什寶の拜觀を行ふ。一同珍寶に眼福を得るとともに、麗かな秋日和の一日を閑寂の境に遊び得たのである。當日展觀せられた主なものは左記の如くである。

大徳寺本坊

大燈國師自筆書狀

楊岐和尚像 文清筆

楚釋寺經

龍虎圖

柏檜盧鷲圖

豐臣秀吉像

織田信長像

織田信忠像

大燈國師辭世偈

後醍醐天皇宸翰

花崗天皇宸翰

巡庵和尚像 嘉定十一年ノ自贊

長生比丘尼像 文安六・七・十養叟贊

養叟和尚像 文清筆
享徳元年九月養叟自贊

大燈國師像 正應改元ノ自贊

後醍醐天皇大燈國師御問答

後醍醐天皇宸影

大燈國師自筆置文 元享四、五、六、元徳三、八、四

大燈國師自筆法語 解是小參隨處作主云々

大燈國師像 傳後醍醐天皇御贊

大燈國師自筆書狀 二月廿四日

高家庄繪圖

楊柳觀音圖

五百羅漢像

十五像

大徳寺諸庄園文書目錄

虛堂和尚像 成淳改元ノ自贊

大燈國師像

大燈國師授機偈

高桐院

山水 吳道子

觀音 雲舟

大燈國師墨蹟

猿 狀處

文珠龍派

利久問答

鷲蓬 羅窓

一	幅	大燈國師自筆書狀	一	幅	大燈國師自筆置文	二	幅
一	幅	楊岐和尚像	一	幅	大燈國師自筆法語	一	幅
二	幅	楚釋寺經	一	幅	大燈國師像	一	幅
一	雙	龍虎圖	一	幅	大燈國師自筆書狀	一	幅
一	幅	柏檜盧鷲圖	一	幅	高家庄繪圖	一	卷
一	幅	豐臣秀吉像	一	幅	楊柳觀音圖	一	幅
一	幅	織田信長像	一	幅	五百羅漢像	一	幅
一	幅	織田信忠像	一	幅	十五像	一	幅
一	幅	大燈國師辭世偈	一	幅	大徳寺諸庄園文書目錄	一	幅
一	幅	後醍醐天皇宸翰	一	幅	虛堂和尚像	一	幅
一	幅	花崗天皇宸翰	一	幅	大燈國師像	一	幅
一	幅	巡庵和尚像	一	幅	大燈國師授機偈	一	幅
一	幅	長生比丘尼像	一	幅	高桐院	一	幅
一	幅	養叟和尚像	一	幅	山水	一	幅
					吳道子	一	幅
					觀音	一	幅
					雲舟	一	幅
					大燈國師墨蹟	一	幅
					猿	一	幅
					狀處	一	幅
					文珠龍派	一	幅
					利久問答	一	卷
					鷲蓬	一	幅
					羅窓	一	幅

細川休齋亭遺圖

一 幅

講演會 十月三十一日(日) 午後一時より樂友會館に於て開催
今年はわざわざ東京帝大より來講せられた山中謙二教授と本會評議員梅原教授とが次の講演を行つた。

法隆寺問題管見

本會評議員
京大教授文學博士

梅原 末治氏

百年戰爭勃發の事情について

東京帝國大學教授

山中 謙二氏

山中氏の講演は追て本誌に掲載せられる豫定。
梅原氏講演要旨は左の如し。

法隆寺問題管見

本會評議員
京大教授大學博士

梅原 末治氏

法隆寺の再建、非再建問題を繞る論争は、周知の如く、明治、大正、昭和の三代に互り、それに拘はつた諸學者のあらゆる精根を傾けて論議した處であり、ひとり其の波及せる分野がまた廣汎であつた許りでなく、實にまた明治以來の我が古代史學界の發達の縮圖たるの觀がある。講演者梅原博士は、此等兩論の提唱者たる喜田、關野兩博士に親炙し、かつ第三者的立場から該問題に關心を寄せられてゐた濱田博士の下にあつて、永年、問題の闡明に密に考慮された立場よりして、この講演に於いて先づ論者達が一方では書紀の記載を金科玉條として更に建築を顧ることなく、他方では建築や古瓦自體の考察に基づく型式の確立に焦點を置かず、徒に聖德太子建立なる先入見を以つて型式を設定し、所論の基盤とした方法論的誤謬を指摘し、更にかゝる誤謬が、其の根底に於いては依然として、法隆寺の天蓋の研究によつて一生面を啓かれた

福山敏男博士や、現法隆寺を飛鳥時代の太子廟と看做す新非再建論者足立康博士の諸論說にも支配的であることに論觸せられ、問題の解決は、建築、古瓦、遺跡自體に依據する嚴正なる歴史考古學的方法と、謙讓にして餘裕ある態度に俟つてあることを強調された。此の意味に於いて博士は、保井芳太郎氏等による大和各地古寺址の古瓦の編年の確立を注意され、また石田茂作博士等が發掘せる法隆寺東南に接した若草伽藍址を重視された。そして右の若草伽藍址を、其の四天王寺式の伽藍配置、礎石の型式とそれに看られる罹災の痕跡及び出土せる古瓦の型式からして熾失以前の法隆寺址に充て、現法隆寺を、其の伽藍配置、礎石の型式と分布、礎石の型式並びに條里制との關係から罹災の再建に係るものと推測するのが、學術的に妥當であり、また無理のない見解であると考へられるが、さればとて此の見解の上に超脱して、濫に劃一的、机上的な臆説を恣にすることも亦、憤むべきであるとの所見を披瀝された。

讀 史 會

讀史會 九月十五日午後六時より、學生集會所乾室に於いて開催。卒業生の大半は近く軍務に就いて國防の第一線に立つことになつてあるので、各々國史研鑽によつて覺得した高く強き信念を披瀝し、西田教授始め諸教官も交々立つて激勵の辭を贈り、感銘深い一夕を共にした。

讀史會大會 今年は内田銀藏教授後二十五年、三浦周行教授には十三年の年忌に相當するので、併せて今西龍、喜田貞吉、牧

野信之助、出雲路通次郎の國史研究室關係諸先賢の慰靈祭、同じく遺著遺墨等の展観、及び講演會を行ふこととし、十一月七日樂友會館に於いて嚴肅且つ盛大に舉行した。會する者東海、中國、遠きは九州にも及び約百名を數へ、時局下極めて意義深き催しであつた。

先賢祭 午前十時より講演室に於いて三浦先生夫人、今西先生夫人、喜田先生令息新六氏、出雲路先生令息敬豐氏の御參列を得西田教授祭主となり、出雲路敬豐氏齋主となつて嚴かに行はれた。

遺著遺墨展 第一號室に六教官の著作物を中心として、これを網羅し、その他自筆原稿、尺牘等の筆蹟も多く展示されて、諸先賢の學徳を追懷欣慕するの念をいよゝ深くするものがあつた。
講演會 午後には再び講演室にて左の九氏による研究發表並びに講演があり、日暮るゝもなほ果てざる盛會であつて、多彩な感銘を覺えたことであつた。

熊澤蕃山の經世濟民說

平安時代の歴史意識について

朱子學の根本原則と近世封建生活の精神

北九州の彌生式文化に就いて

中世思想史の一斷面

京都貸付會所に就いて

平安奠都の問題

日本教學の一形態

石澤 澈氏

平松 令三氏

石田 一良氏

鶴田 忠正氏

前田 一良氏

寺尾 彦二氏

柴田 實氏

藤 直幹氏

明治時代の歴史學

西田直二郎氏

鍊成見學行事 文科系學生の徵集延期制の廢止に伴つて、學業を半ばにして勇躍管門に入る若人の鍊成の行事が企てられた中に國史研究室に於いては西田教授以下諸教官の陣頭指揮の下に、教室より實地に就いて日本文化の眞髓を體得すべく左の如く數度に互つて見學を兼ねた身心鍊成の行事が行はれた。

十月二十六日には水無瀬神宮に參拜、後鳥羽天皇の聖業を仰ぎ山崎の地の歴史的な位置を回顧した。(中村助教指導)

十一月二日 山中越えの道より崇福寺趾を訪ひ、大津京の地を踏査して、近江神宮に參拜、天智天皇の聖徳を偲び奉つた。(柴田講師指導)

十一月六日 大和法隆寺をはじめ法起、法輪の二寺にも詣で、古代文化の精華に接した。就中法隆寺に於いては修理中の五重塔に新に發見せられた壁畫を見ることの出來たのは大きな喜びであつた。(東伏見講師指導)

十一月九日 雨中洛北鞍馬寺に到り、古來武人の信崇篤き毘沙門天を拜み、又は石造美術品等の史料を拜觀した。(藤助教指導)

十一月十三、十四の兩日には諸教官引率の下に近江湖東地方を踏査し、先づ安土城趾に上り、織田信長の天下布武の經綸を想ひ惣見寺、淨嚴院を訪ひ、彦根城趾にて近世封建大名の藩國經營の規模を察して多神賀社に到り、深更に至るまで所藏文書、古式の祭儀等の見聞に疲勞を忘れ、第二日は早朝多賀大神に武運長久の

熟壽を捧げ、胡宮神社より、西明寺、金剛輪寺を歴訪して、鎌倉の優秀な建築佛像の數々を拜觀、元寇當時の國民の強烈な精神に觸れた。夜は愛知川の古い街道町に先輩諸氏の設けられた宴席に招ぜられ、壯行を祝すること極めて盛なるものがあつた。

十一月十六日 表千家の茶室茶庭を訪ひ、次いで武者小路千家堀内家の兩家にて御躰前を拜見、茶道による日本精神の至妙な顯現を盛得するところがあつた。(西田教授指導)

十一月二十日 には本學の壯行會の後、諸教官の指導の下に南大和藤原宮跡を見學し、樞原道場に入り、國史館、文庫を巡覽して八款寮に宿泊、翌廿二日は樞原神宮、神武天皇陵に參拜して肇國の宏謨を仰ぎ、武運長久の祈願をこめ、二上山麓を南河内に入り、壺井八幡にては河内源氏の發祥地を探り、徽福寺に聖德太子の御墓に詣で、飛鳥朝の偉業を想ふこと切なるものであつた。これより土師神社を訪ひ、道明寺にては本尊佛を拜し、聖德太子孝養像の胎内より發見された文書經文等により鎌倉時代の信仰形態の特性を考へ、巨大な應神天皇陵を仰ぎつゝ、譽田八幡神社に再び祈願を致した。夜に入つては古市町森田博三氏の邸に於いて戰國以來武將の書狀等夥しい文書を閲覽することの出來たのは有終の喜びであつた。

東洋史談話會

新講師・新任助手・新專攻生歡迎會 十月十三日午後六時より學生集會所に於て開催、那波教授、宮崎、田村兩助教授以下多數の參會者一同晚餐を共にし愛宕講師、藤原助手並びに新專攻學生

の自己紹介あり盛況裡に會を終る。

第八回大會 十月十七日午後一時より樂友會館講演室に於て開催、田村助教授の閉會の辭に始まり安部助教授の司會の下に左の十氏の研究發表あり。終つて那波教授閉會の辭を述べられ午後五時半頃散會。引續き同會館食堂に於ける晚餐會に入る。

一、金世宗時代に於ける漢人の叛亂事件に就て

北村 敬直

一、大平天國の經濟機構に就て

波多野善大

一、青唐吐蕃と十二獸紀年法

岡崎 精郎

一、清朝による里甲制の繼承

松本 善海

一、漢代廣東佛印地方の開化

田村 實造

一、周初の天命觀念

小川 茂樹

一、扶南の建國と印度の移民

杉本直治郎

一、李鴻章ロバノフ密約

丹羽 正義

一、唐代の行人

那波 利貞

一、渤海の中京に就て

鳥山 喜一

昭和十八年東洋史專攻學生出陣壯行會 十一月十七日午後一時半より西部構内學生食堂にて開催、苛烈なる決戰段階に在る大東亞戰爭が現状より國家の要求に従つて學業の半途より勇躍出陣する東洋史專攻生を激勵せんとする趣旨の下に東洋史研究室の主催を以て其の壯行會を開く。那波教授、宮崎、田村兩助教授以下の俄の言葉に對して送らるゝ學生諸氏には孰れも力強い應答の辭が述べられた。

卒業生送別會 九月二十八日 於高臺寺一休庵

出席者：原教授、鈴木助教、中山、前川兩講師以下十三名。原教授より本年度卒業生に懇な餞の言葉を送られこれに對し卒業生の謝辭あり、記念撮影の後和氣霧々裡に八時過ぎ散會。

第十一回讀書會大會 十一月三日午後一時 於樂友會館

大東亞戰爭は愈熾烈の度を加へ、學生諸子はペンを置いて銃を執り前線へ馳せ参ずる事を要請される此の重大時局下、こゝに明治の佳節を下して第十一回西洋史讀書會大會の開催を見た事は、其の意義の例年にまして重且大なるを覺える。遠路御來駕を賜はつた東北帝大の大類博士、東京文理大の杉氏、東大の金澤氏外四氏の來賓を初め同學の士多數の參集を得、開會劈頭先づ原博士起つて挨拶に代へて「戰爭と史學」なる決戦下好個のテーマの下に熱辯を振はれ、戰爭と史學との聯關を學的に解明されつゝ戦時下史學學徒の進む可き大道を明示され、聽衆一同深く感銘、奮勵以て其の重責を果さん事を誓つた。續いて講演者交々登壇、日頃の蘊蓄の一端を吐露され、午後五時過ぎ、盛會裡に講演會を終了。次いで午後六時より下鴨無庵に於いて、學怒を出でて前線へと立たれる學生諸君の壯行會を兼ね晩餐會を開催。諸先生諸先輩より種々激勵の御言葉や御感想を賜ひ、和やかな内にも一脈の緊張味を漂はせつゝ午後九時過ぎ會を閉じた。

出席者は講演會約六十名、晩餐會二十八名。

講演の内容梗概は左の如くである。

一、戰爭と史學に挨拶に代へて 原 隨園先生
一、マニフェスト・デステイニイ 今津 晃氏

——米國帝國主義の原動力に關する一つの問題——
一八九八年に米國が傳統の孤立主義を放棄して新たに叢策・遂行した所謂「大政策」(“the Large Policy”)の原動力としては種々の要素を擧げうるであらうが、マニフェスト・デステイニイと云ふ思想とも言葉ともつかない一つの魔術的な思想が、之に與つて大いに力あつたことを考察せんとするものである。

此の思想は本來、北米大陸への發展に於けるスローガンであり傳統のコンティネンタリズムの中に其の發展と其の限界とを有すべきものであつた。然るに、それが米國帝國主義の一精神的地盤として太平洋政策の推進力となつたことは、其の有する思想的矛盾に拘はらず、幾多の考へさせられるべき問題を提供する。論者は之を歴史事實に於て例證し、併せて之を歴史の審判の前に立て判決を試みんとするものである。

一、歴史學派の問題 兼岩 正夫氏

——獨逸復古時代理解の一方法——
歴史學派といふ名稱は、たとへば歴史法學派を指す場合の如く學的方法論上の概念として使用される事が多いが、これを更に廣く深く把へて精神史的概念として考へて見度い。かゝる意味での歴史學派は、その概念的要素として民族精神説を中心とするオルガノロギシを持ち、しかも此のオルガノロギイは後期浪漫派から流れ出た浪漫的要素であると考へられるのであるが、此の浪漫的

直觀的歴史感覺は必然的に批判的な過去の事實研究を要請するものであり、かくて歴史學派にては、浪漫的有機體說的歴史觀と現實主義的經驗的個別研究とが結合されて居る。かく解せられた歴史學派の問題を、我々は、ドイツの復古時代即ちビュルグーマイヤ一時代理解の一方法として考へんとするものである。

一、近代ヨーロッパ精神とルネサンスとの關係に

ついで

顯見 高年氏

「近代の超克」といふことが論議されるにつれ近代ヨーロッパの出發點であるルネサンスについても活潑に論ぜられて來た。その際ルネサンスは近代的誤謬の根源であるといふ考へ方が有力になつてゐる。かゝる見解は全面的にうけ入れることが出来るであらうか。近時のルネサンス研究の結論であるルネサンスを以て中世と近世の過渡期として把握せんとする立場を以てすれば、精神構造に於ても特殊な構造を考へねばならないのであつて、十九世紀とルネサンスを同一觀點で考へることに注意を要する。今このことをルネサンスの宗教性的問題によつて考へて見るにルネサンスは「人間及び世界の發見」といはれる様にたしかに中世に於けるごとく超越の神でなく、神が人間及び自然の中に姿を顯し給ふことを考へねばならないが、さりとてこうした神の内論は十九世紀に見られるごとく超越面を失つた内在ではなく、したがつてルネサンス人は神を無視した様な人間ではなかつた。むしろ超越と内在、神と人間、マクロコスモスとミクロコスモスの矛盾の綜合にルネサンスの偉大なる精神があり、このことはルネサンスの

天才の達した高い境地である。したがつてルネサンスは近代的誤謬の根源として斷罪されるよりは、むしろ近代の超克に際して新しい意義を持つ時期として考へねばならないのである。

一、ギリシア「アルカイック」

村田數之亮氏

「アルカイック」は古拙とか稚拙とか譯されるが、それは完成としての「クラッシク」に對する「準備」としての理解に基づくもので、二十世紀までは、左様に解されてきた。しかし乍ら「アルカイック」にはそれ自身としての價值なり本質なりがないであらうかが、漸く問はれてきた。その解答としては一つは宗教性が他は新興民族の生命力が擧げられてゐる。現在のアルカイック論はこの二つの何れかに屬すと思はれる。しかし私はこの二つは同一のもの異なる面のみと思ふ。即ちこの場合の宗教性とは非オリシポス的なアポトロバイオ的なそれであるが、この強烈な禁厭的力は強き生命力より發し得るものであるから。しかしギリシアのアルカイックが成立するためには更に一つギリシア的なものが必要である。それはオリシポス宗教の擬人的神觀であつて、これによる前者の超人的超越的なものが制約されし所、アルカイックがあり、この非人間的な要素が制厭し盡した時、クラッシクに至る。

一、dingir = an = legal に就て

中原與茂九郎氏

——杉學士に答ふ——

地理學談話會

豫饒會 今年度新卒業生八名に對する恒例の豫饒會は、九月十

六日(木)午後五時から樂友會館において開催。二回生小糸君の挨拶、小牧教授の歡送の辭に對し、三回生船越君答辭をのべ、次で藤田元春先輩より祝辭を述べられ盛會であつた。

例會 十月九日(土)午後二時より地理學實習室に於て開催。小牧教授をはじめ出席者十八名。

一、濠洲經濟論

河地 貫一氏

一、フィリッピンの民族

野間 三郎氏

秋季例會 恒例の秋季例會は十月三十一日(日)午前九時より樂友會館において開催せられ、左記の研究發表あつて後、記念撮影を行ひ、次で午餐會に移り、出演者並に遠路參集せられた卒業生諸氏相寄り久方ぶりの歡談に花を咲かせた。

一、開會の辭

室 賀 講師

一、印度洋の機能

村上 次男氏

一、兵庫縣の聚落(豫報)

小葉田 亮氏

一、華北交通概要

藪内 芳彦氏

一、地政學者としての頼山陽

内田 秀雄氏

一、南方に於ける水産基地

吉田 敬市氏

一、蝦夷地開拓に見たる國防道路に就いて

和田 篤憲氏

一、准南子の民食について

藤田 元春氏

一、閉會の辭

小 牧 教授

武運長久祈願 十一月十一日(木)。この日小牧教授、野間講師をはじめ研究室の有志者相寄り、三回生の片倉、土井、西山、野

崎の四君も參加して、健歩を兼ね遠く小楠公を奉祠し奉る四條暇神社に參詣、近く入營又は應召して壯途につく學生諸君のため、小牧教授願主となつて玉串を奉奠し武運長久の祈願を籠めた。

二回生歡迎會兼壯行會 十一月十八日(木)午後五時より學生集會所において舉行。本年地理學專攻の新二回生は二十三名を數へ實に我が地理學教室創設以來かつて見なかつた盛況である。併しながらその大多數は今回の徵集延期撤廢の結果、決戦應召に應へて勇躍入營又は應召することとなり、恒例の二回生歡迎會は即ち壯行會を兼ねることとなつたのである。

この夜、參集者一同の記念撮影について簡素な晩餐會に移る。小牧教授、藤田元春先輩、松井講師、野間講師等交々立つて激勵の辭ををくられ、學生また征くもの留るもの夫々その深き決意の程を吐露してこれに應へ、小牧教授は出征學生一人一人を呼んで明治神宮の御守を贈られた。一人一人の若い學徒が靜かに御守を受け、鄭重に胸にをさめて行く光景には實に胸迫るものあり、萬歳を絶叫し感激のうちに夫々歸途についた。

考古學教室近況

卒業生豫饒會 九月十六日(木) 正午樂友會館にて行ふ。梅原教授、村田講師以下十二名出席、食事を共にして、卒業の上海軍豫備學生として入團の樋口隆康君を送る。

實地指導 十月九日(土) 午前八時出發、南河内方面に新學年第一回の梅原教授の實地指導を行ふ。參加者小林助手以下十五名先づ野中寺に詣でて、新たに究められたる同寺塔趾心柱礎並に出

土遺物類を見學の後、その南方の善正寺山にある藥師寺式伽藍配置の古寺趾を訪ひ、更に南方の羽曳山中にて新たに發見の奈良朝と思はれる火葬墓を調査した。

備中高島遺跡の發掘 同地聖蹟保存會の要請に應じ、十一月二日より十五日に至る約二週間、梅原教授、小林助手、角田副手及び學生二名が出張して、同島王泊に於いて史前代よりの僧序の相重ねる遺跡の發掘を行ふ。その結果上代の住居の遺構に就いて興味ある新事實を見出した。

教室關係出陣學徒壯行會 考古學談話會の主催にて、十一月廿三日午後五時より十一屋に於いて行ふ。出席者梅原、田村、村田三教官以下十四名、二回生葦原治、生徒坪井清足並に岡崎敬、三君の行を盛んにした。

出版物 十一月末附で嚮に第一冊を出した考古學資料叢刊の第二冊として梅原教授編著の『支那漢代紀年銘漆器圖說』(文星堂刊定價三十圓)の出版を見た。目下その第三冊として『唐鏡大觀』が印刷中であり、またこの三四年間に於ける教室員の業績を纏めて『考古學研究報告』の第十七冊を刊行すべく準備中である。

會報

會員動靜

京都市伏見區深草西出町八五
京都市下京區東山五條上ル

辻井喜一郎氏
山崎 謙哉氏

大阪府天王寺區味原町九九田中ビル内

(右藤岡謙二郎氏紹介)
田中 稔氏

轉居

荻屋市杖東一五七三

野田好太郎氏

新京特別市同德臺陸軍軍官學校官舎卅一

小倉 親雄氏

奈良市法蓮左保川町 水野方

藤井 貞文氏

寄贈交換圖書

教 學 九の八

國民精神文化研究所

考古學雜誌 三三の七、八、九

日本考古學會

國學院雜誌 四九の八

國學院大學雜誌部

國語・國文 一三の九、一〇、一一

京都帝大國文學會

環 春 敦 化

滿洲古蹟古物名勝天然紀念物保存協會

史 學 二九

九州史學會

史 學 二二の一

三田史學會

史 學 雜誌 五四の九、一〇、一一

史 學 會

史 迹 と 美 術 一四の八、九、一〇

史迹・美術同政會

社 會 學 徒 一七の七、八

社會學徒社

社 會 經 濟 史 學 一三の五、六

社會經濟史學會

人 類 學 雜 誌 五八の九、一〇、一一

日本人類學會

敦賀郡古文書
哲學研究 二八の九、一一

東京御茶水に於て發見せる

地下式横穴の研究(日本史蹟研究所)

東方學報 東京一四の二

東洋史研究 八の三、四

文化 一〇の八、九

民族學研究 新一の九、一一

蒙古 一〇の二〇

立命館大學論叢 一五(國語漢文篇四)

歷史學研究 一三の八、九

歷史地理 八二の二、三、四

桑原武夫氏
京都哲學會

上田三平氏

東方文化學院

東洋史研究會

東北帝大文學會

民族學協會

善隣協會

立命館出版部

歷史學研究會

日本歷史地理學會